

## 副詞「ひょっとすると」類の成立：副詞の呼応における仮定と可能性想定の変化

川瀬, 卓  
白百合女子大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/4782116>

---

出版情報：語文研究. 130/131, pp.469-455, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 副詞「ひよっとすると」類の成立

## —副詞の呼応における仮定と可能性想定との分化—

川 瀬 卓

### 1. はじめに

擬声語（擬音語・擬態語）は、音象徴性を次第に消失し、時には文法的機能までも変化することがある（壽岳1956）。壽岳（1956）も指摘するように、そのような例の1つに「ひよっと」がある。現代語において、「ひよっとすると」「ひよっとしたら」「ひよっとして」（以下、これら3つをあわせて「ひよっとすると」類とする）<sup>(注1)</sup>は、主に「かもしれない」「のではないか」と共起することから、可能性想定を表す副詞であるとされる（宮崎<sup>(注2)</sup>2005）。

- (1) ひよっとすると／ひよっとしたら／ひよっとして、明日いいことがあるかもしれないよ。

しかし、古くはこうした可能性想定を表す「ひよっとすると」類は見られない。例えば、中世後期においては、以下のような擬態語としての「ひよっと」のみが見られる。

- (2) モルテがひよっと (fiotto) 来て、「これに居まらす。何の御用ぞ」と言へば、(エソポのハブラス [1593]・老人の事)<sup>(注3)</sup>

「ひよっと」はいつどのように変化して、「ひよっとすると」類が成立するにいたったのだろうか。

「ひよっと」の歴史的なありようについて、ある程度詳しく言及している研究に、山口（2000）がある。山口（2000）は類義語も視野に入れて「もし」が仮定専用の副詞になる歴史変化を論じた論考である。「ひよっと」については「事柄の現れ方の意外さを模写的に表す擬態語」（山口2000：121）としたうえで、仮定条件節や疑問文で用いられる用法もあることや、「ひよっとすると」「ひよっとしたら」などが「ひよっと」の肥大化した形式として捉えられることを指摘している。しかし、汎時的な言及の仕方となっているため、「ひよっと」の歴史変化については明らかにされていない。

また、「ひよっとすると」類には、類義語として「もしかすると」「もしかしたら」「もしかして」（以下、これら3つをあわせて「もしかすると」類とする）がある。「もしかすると」類の成立については、山口（2000）や小池（2003）で

論じられているが、いずれも「ひよっとすると」類との関係については、あまり注意が払われていない。「ひよっとすると」類と「もしかすると」類は、意味的に似ているだけでなく、「する」と接続助詞を構成要素に持つ点で語構成的にも似ている。このことは単なる偶然なのだろうか。

本稿では「ひよっと」の歴史変化を明らかにするとともに、「ひよっとすると」類の成立が歴史的にどのように位置づけられるのかを考察する。その上で、副詞の呼応の問題が日本語文法史にどのような示唆を与えるのかということも考察したい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず2節で「ひよっとすると」類が成立して定着するまでの「ひよっと」の史的展開について述べる。次に3節で仮定・可能性想定と呼応する副詞の歴史という観点から「ひよっとすると」類の成立を捉えなおし、類義語である「もしかすると」類との歴史的関係について考察する。4節では副詞の呼応の分化を日本語の歴史的動向と関連づける。最後に5節で本稿の考察をまとめる。

## 2. 「ひよっと」の史的展開

### 2.1. 「ひよっと」の音象徴的意味

擬態語の副詞「ひよっと」は、中世後期から見られる<sup>(注4)</sup>。使用頻度はさほど高くなく、中世後期の口語資料として調査した範囲では、抄物資料に14例、キリシタン資料に2例、狂言台本に3例であった。

「ひよっと」の意味用法は、中世後期から近世初期にかけては大きく2つ、さらに派生的なものをあわせて、計3つに分けることができる。1つめは、主に発言、移動を意味する述語を修飾し、予期しない動作が突然生じるさまを表すものである。意外性の含みを感じられる場合もある。「思いがけず」「不意に」「急に」のように訳すことができる。

- (3) a. 過-云ハントモ思ハイテヒヨツト云カ過ソ (古文真宝彦龍抄 [1490頃]・83オ)
- b. 筑紫坂東ヘイクハヒヨツトハイカレマイ一季ノ間モ用意スルナルヘシ (莊子抄 [1530]・巻1・12ウ)
- c. ひよっと (fiotto) そこへ参ったれば、三位の入道さればこそと云うて喜ばれた。(天草版平家物語 [1592]・巻2)
- d. 楽人ノ云ハ鳥獸ノ音モ皆律ニ応スルカ只鴉ノ声カ不応律ソ低歎トスレハヒヨツト高ソ (史記抄 [1477]・巻2・41オ)

(3a-c) を見てわかるように、どのような事態についても使われるというわけではなく、十分な用意や考えなしに体が動くことや何かを言うことを表す際に用いられるものだったようである。なお、(3d) は「ひよっと」が形容詞「高い」を修飾しているが、カラスの鳴き声が低かったり急に高くなったりするという文脈であり、(3a-c) に準ずる例と見なせる。

2 つめは、物が軽く突き出ている様子を表すものである。<sup>(注5)</sup> なお、この用法は、中世後期に 4 例 (いずれも抄物資料)、近世前期に 2 例 (井原西鶴の浮世草子に 1 例、近松門左衛門の世話物浄瑠璃に 1 例) しか見られなかった。

(4) a. 土ヲクハツト庭ノマワリヘモチアケテ箒カ土ヲ裂テヒヨツト出タソ (四河入海 [1534]・巻10の1・13ウ)

b. 頬さきの握り出したる丸がほも見よし。又額のひよつと出たも、かづきの着ぶりがよいものなり。(世間胸算用 [1692]・巻2)

3 つめは、1 つめの用法からの派生的なもので、予期しない事態が突然生じたという意味とのつながりを有しつつ、ある動作が意図せず起こってしまったという動作の無意志性を表すことに重点があるものである。現代語の「うっかり」に近い意味を表す。

(5) a. そなたは、よふ見知りまらしたが、ひよつと、見忘れて、聊爾な事、致いた、御免なれと云 (狂言六義 [1645前後か]・瘦松)

b. ひよつとやとはれて、足のいたむに、(西鶴織留 [1694]・巻4)

c. わがミの事をとうたによつて、ひよつと口がすべつて、わがミハ夕部死にやつたといふてのけた。(座狂はなし [1730]・巻上)

ある動作が予期せず突然生じるということは、何かをしようと思ってそうしたわけではなく、動作主の意図とは無関係に生じてしまった突発的なものであるということと隣り合わせである。そこから、動作が無意志的であることに意味の重点がある使い方もされるようになったのだろう。この場合、望ましくないことが意図せず生じたというマイナス評価を伴うようである。

## 2.2. 「ひよっと」と仮定・可能性想定との結びつきの発生

1700年代に入ると、(6) のように仮定条件節で用いられる「ひよっと」が見られるようになる。

(6) a. もしひよつと死に病受けたりとも、母様の懐かしさに、臨終もし損なひ。いかなる恥もさらさうか (心中刃は氷の朔日 [1709]・51- 近松 1709\_17002,57930)

- b. ア、酒に酔うたら忘れて、ひよつと言やれば悪い. (大経師昔暦 [1715]・51- 近松1715\_23003,10140)

これらは、ある事態が突然生じることへの危惧を仮定の事態として提示している。(6a)は「もし」と共起している点、(6b)は「うっかり」のような無意志的な意味とも解釈しうる点など、「ひよつと」が持っていた象徴的意味もある程度保ちつつ、仮定条件節で使われるようになっていく。

また、「ひよつと」が仮定条件節で用いられるようになるのと同時期に、疑い表現とともに用いられる例も見られるようになる。(7)のような例である。

- (7) この冷たさでしまへばよいが、ひよつと憂い目は見せまいか. (心中天の網島 [1720]・51- 近松1720\_20003,15570)

これは「寒いだけですめばよいが、死んでしまわないだろうか」と、危惧される事態が生じる可能性を述べている例である。疑問文によって、話し手は1つの解答を提示しながらも、それがはっきりとは断定できず、他の可能性も捨てきれないということを表している。

「ひよつと」は、ある事態が予期せず突然生じることを表す用法を持っているが、それは体や口の動きといった、何かの拍子にたやすく生じてしまいそうな事態に主に使われるものだった。その成立的側面が注目され、予期しない事態の突然の発生を想定することに使われるようになったものが、仮定条件節で用いられる「ひよつと」や疑い表現とともに用いられる「ひよつと」だと思われる。危惧と結びつきやすいのは、ある事態が意図とは無関係に突然発生することをわざわざ想定するのは、それが望ましくない場合のほうが多いということなのだろう。<sup>(注7)</sup>

こうした仮定や可能性想定との結びつきは、近世後期になると、より顕著になる。次に示すのは、近世後期江戸語の例である。(8)は仮定条件節、およびそれに準じる形式と用いられた例、(9)は可能性想定を表す述語形式とともに用いられた例である。

- (8) a. 今宵ハ初夢。ひよつとわるい夢でも見れバ気にかゝるが、(蝶夫婦 [1777])  
b. とさんの留守にひよつと怪我でもして見やれ。とさまがかへらしやつて此母が何と言訳が有ふと思ふ (明烏後の正夢 [1821-1824]・53- 人情1824\_08012,27330)  
c. ひよつとまたうかれ仲間が押込むといけねへから (春色辰巳園 [1833-1835]・53- 人情1833\_04001,64220)

- (9) a. ひよつと くい物でハ有まいかと、一ト口喰<sup>くつ</sup>てミレバ (大御世話 [1780])  
 b. ひよつと 此節<sup>このせつ</sup> おたづね者の丹次郎をかくまつてあるもしれねへ (春色梅児誉美 [1832-1833]・53-人情1832\_02005,3300)  
 c. よもやとおもへど若<sup>もし</sup>ひよつとと難義の懸る大変を仕出したるかと案じられ (春色梅児誉美 [1832-1833]・53-人情1833\_02009,30980)

突然性や無意志性の意味を感じ取れるものもあれば、そうした意味とのつながりが薄いと思われるものもある。音象徴的意味の有無は判断が難しいが、例えば、(8b) (8c) (9c) などは突然性の意味が比較的感じ取れると思われる。「ひよつと」が音象徴的意味をある程度有していることは、(6a) や (9c) のように、「もし」と「ひよつと」が共起した例が見られることからわかる。しかし、近世後期における「ひよつと」は明らかに仮定条件節での使用や、可能性想定を表す述語形式との使用に偏る。

実際に用法の分布を見てみよう。表1は近世における「ひよつと」の意味用法を資料の種類ごとに整理したものである。近世後期は宝暦元年(1751年)以降とし、上方と江戸で分けている。「突然」「軽く」「無意志」はそれぞれ2.1で見た3つの用法を指す。「仮定」と「可能性」はそれぞれ(8)と(9)のような「ひよつと」のことである。音象徴的意味が感じられるかどうかに関係なく、構文的観点から判断し、「ひよつと」が仮定条件節で用いられているものを「仮

表1 近世における「ひよつと」の意味用法

		突然	軽く	無意志	仮定	可能性	計
近世前期	噺本	7		5			12
	浮世草子		1	1			2
	近松世話浄瑠璃	2	1		2	1	6
	浄瑠璃	2			2	1	5
近世後期 上方	噺本	1		1	11	2	15
	浄瑠璃				1		1
	歌舞伎				3		3
	洒落本				5	3	8
近世後期 江戸	噺本	2			15	3	20
	歌舞伎				2	2	4
	黄表紙				1		1
	洒落本				5	1	6
	滑稽本				5		5
	人情本				52	26	78

定」とし、疑いを中心とした可能性想定を表す述語形式とともに用いられているものを「可能性」とした。なお、後で言及する「ひよっとすると」類も区別せずに集計に含めている。

表1から、近世前期までと異なり、近世後期では仮定条件節や可能性想定を表す述語形式とともに用いられたものがほとんどであることがわかる。上方でも江戸でも同様の分布になっていることから、「ひよっと」と仮定・可能性想定との結びつきという点で東西差はなさそうである。

### 2.3. 「ひよっと」から「ひよっとすると」類へ

近世末になると、「ひよっと」に「する」と接続助詞が下接した形式が複数見られるようになる。(10)に示すように、人情本には「ひよっとすると」「ひよっとしたら」「ひよっとして」全ての形が現れ、「ひよっとすると」類が<sup>(注8)</sup>出揃う。

- (10) a. それに多満屋へ往つしやる連衆と一所だから、ひよつとすると付合つきあへにかつしやるたまたまかもしれねへヨ。(春色恵の花 [1836]・2編・巻下)
- b. 其茶入の這入いって居る。質やの名前書を。吾儕わちきがくわしく視ましたから。萬一ひよつとしたら今迄その質やには。置まいかと思ひんすハト。(春色恋廻染分解 [1860-1865]・5編・上)
- c. 小「ナニサ、マアネ、万ひよつと一して私わちきがお前さんに不実らしい事が有たらば、其時は私わちきを何様どうせうとお思だと申す事サ。(春色恋白波 [1839-1841]・2編・巻3)

次の(11)は、明治期に入ってから例である。

- (11) a. 北「ホンニ何奴どいつがしやアがツたいたづらだらう 通「ひよつとすると女中をんな達だかもしれねへヨ(西洋道中膝栗毛 [1870-1876]・8編・下)
- b. 此頃まぶらの拳動こぶしと云ひ容子ようすと云ひヒヨツとしたら本田に……何しては居ないかしらん……(浮雲 [1887-1889]・2篇・11)
- c. しかし今まで免官に成つて程なく復職した者が無いでも無いからヒヨツとして明日にも召喚状が……イヤ……来ない召喚状なんぞが来て耐たまるものか(浮雲 [1887-1889]・1篇・4)

こうして新たに生じた「ひよっとすると」類は、近代以降、次第に「ひよっと」に取って代わっていく。表2は近世後期から大正期までの「ひよっと」と「ひよっとすると」類の用例数を示したものである。明治前期は1880年代までの開化期文学、明治期小説を資料とし、明治後期と大正期はそれぞれ『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』の明治期と大正期のものを資料としている。

表2 近世後期から大正期までの「ひょっと」と「ひょっとすると」類の用例数

	「ひょっと」			「ひょっとすると」類		計
	突然	仮定	可能性	仮定	可能性	
近世後期（江戸）	2	78	26	2	6	114
明治前期		8	3		4	15
明治後期	2	3	1		3	9
大正期	3		2	3	10	18

表2を見ると、近世後期江戸語においては合計114例に対して8例（7.0%）だった「ひょっとすると」類が、大正期には合計18例に対して13例（72.2%）を占めるにいたっている<sup>(注9)</sup>。

注目したいのは、複合的な形式である「ひょっとすると」類が、「ひょっと」と違って可能性想定を表す述語形式と主に共起する点である。「ひょっとして」は、仮定条件節でも用いられることがあるものの（表2の「ひょっとすると」類における「仮定」は全て「ひょっとして」である）、「ひょっとすると」「ひょっとしたら」は仮定条件節で用いられることがない。「ひょっとすると」類全体として見れば、可能性想定<sup>(注10)</sup>の副詞という性格にかなり傾くと言えよう。

### 3. 仮定・可能性想定と呼応の分化

#### 3.1. 古代語と現代語での呼応のあり方の違い

2節で、「ひょっとすると」類が成立して定着するまでの「ひょっと」の史的展開について考察してきた。擬態語として音象徴の意味を表していた「ひょっと」は、1700年代初頭から仮定や可能性想定を表すようになり、近世末になると、主に可能性想定を表す「ひょっとすると」類が現れた。さらに近代以降、「ひょっとすると」類が一般的になり、「ひょっと」は仮定や可能性想定を表さなくなった。以上のような歴史変化は日本語史においてどのように位置づけられるのだろうか。視野をさらに広げて、仮定・可能性想定と呼応する副詞の歴史という観点から捉えなおしてみよう。

古代語では同じ副詞が仮定も可能性想定も表していた。中古和文における「もし」は(12)のように仮定だけでなく、(13)のように可能性想定を表す疑問文とも結びついている。

(12) もしながらへばよろづにはぐくまむ（源氏物語・夕顔）

(13) もし見たまへ得ることもやはべる（源氏物語・夕顔）

(12)は「もしわたしがもっと生きていられるのだったら」、(13)は「もしかした



ら何か見つけ出せることもあるでしょうか」というように解釈される。(13)は直接的には「や」による係り結び文、すなわち疑問文で用いられているが、この場合の疑問は、可能性としてありうる事態を疑問の形で差し出しているものである<sup>(注11)</sup>。

一方、現代語において仮定を表す副詞と可能性想定を表す副詞は違った語形である。仮定では(14)のように「もし」が用いられ、可能性想定では(15)のように「もしかすると」類、「ひよっとすると」類が用いられる。

(14) もし宝くじにあたったら、何をしますか。

(15) a. もしかすると／ひよっとすると 今日はいいことが起きるかもしれない。

b. もしかしたら／ひよっとしたら 明日は雪が降るかもしれないよ。

c. もしかして／ひよっとして 時間を間違えたのだろうか。

このように、仮定・可能性想定と呼応する副詞を見てみると、古代語と現代語とで、副詞と陳述の意味の呼応のあり方が異なっていることがわかる。

こうした副詞の呼応の分化はどのように生じたのであろうか。山口(2000)で論じられているように、中世後期以降に一語化したと見られる「もし」の肥大形(「もしも」「もしや」など)とその推移が関与するのは間違いないだろう。山口(2000)は、「もし」が仮定専用になる歴史変化として、近世には「もしや」が疑問との共起を中心に「もし」の意味領域を一部担うようになり、近代以降に「もしか」が現れて「もしや」と交替し、それが最終的に「もしかしたら」「もしかして」などに引き継がれるという流れを想定している。山口(2000)は「もしかすると」類を「もしも」「もしや」「もしか」と同じようなものとして考え、「もしかすると」類の成立自体はそれほど重要視していないようであるが、小池(2003)は明治期における「もしや」「もしか」が可能性想定のみならず仮定でも用いられることから、可能性想定専用形式が求められて「もしかすると」類が成立したと考えている。

しかし、山口(2000)も小池(2003)も、歴史変化における「ひよっとすると」類の位置づけについてはあまり注目していない。「ひよっとすると」類は「もしかすると」類と歴史的にどのような関係があると言えるのだろうか。

### 3.2. 「ひよっとすると」類と「もしかすると」類の歴史的関係

注意したいのは、「ひよっとすると」類と「もしかすると」類の出現時期のずれである。すでに見たように「ひよっとすると」類は近世後期には出揃っていた。一方、「もしかすると」類の出現は明治期の後半まで待たねばならない。つ

まり、「する」を伴う形式の出現は「ひょっと」が先行し、「もし」はそれに遅れるのである。

『和英語林集成』（初版、1867年）の「ひょっと」と「もし」の項目を見てみると、(16) のようになっている。

- (16) a. HIYOTTO, ヒヨツト, 標, *adv.* If, supposing that. — *shiretara dō nasaru*, if he should know, what should you do? *Hiyotto-szre-ba*, perhaps, it may be. *Hiyotto shitara*, *Idem.* Syn. MOSHI.
- b. MOSHI, モシ, 若, *adv.* If, provided that, whether. Syn. HIYOTTO, MAN-ICHI.

「ひょっと」と「もし」が類義語として相互参照されているが、「ひょっと」の項目で「ひょっとすれば」「ひょっとしたら」といった「ひょっとすると」類もあげられているのに対して、「もし」の項目に「もしかすると」類は見当たらない。「もしかすると」類に言及がない点は再版（1872年）や3版（1886年）も同様である。また、『言海』（1889-1891年）においても、「ひょつと」の項目で「ひょっとしたら」があげられている一方、「もし」の項目を見ても「もしかすると」類についての言及はない。

『日本国語大辞典 第2版』（小学館）では、「もしかすると」の初出例として樋口一葉「わかれ道」（1896年）の例、「もしかしたら」の初出例として武者小路実篤「世間知らず」（1912年）の例、「もしかして」の初出例として石川啄木「菊池君」（1908年）の例があげられている。『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』における「もしかすると」類の使用状況は、1901年に1例（「もしかすると」）、1909年に1例（「もしかしたら」）、1925年に15例（「もしかすると」）8例、「もしかしたら」6例、「もしかして」1例であった。このように、「もしかすると」類は明治期の後半に見られはじめ、大正期の終わり頃に定着するようである。

この点について、小池（2003）に興味深い調査結果が示されている。表3は、小池（2003）による明治期から現代までの文学作品の調査結果を整理しなおしたものである。いずれも可能性想定を表す例のみの数字である。小池（2003）では「ひょっとすると」類と「もしかすると」類の先後関係については注目されていないが、表3を見ると、「ひょっとすると」類に遅れて戦前期に「もしかすると」類が現れ、戦後期以降「もしかすると」類が勢力を伸ばしていくという歴史的推移が見てとれよう。つまり、現代語では使用頻度の面で可能性想定を表す副詞の代表的なものである「もしかすると」類が、「ひょっとすると」類よりも後発の形式であることがわかる。<sup>(注13)</sup>

表3 近現代における「ひょっとすると」類、「もしや」「もしか」「もしかすると」類の用例数

	明治期 1888-1912	戦前期 1913-1945	戦後期 1946-1973	現代期 1974-2000
「ひょっとすると」類	10	12	31	47
「もしや」	53	8	1	4
「もしか」	6	5		
「もしかすると」類		12	46	122

※明治期、戦前期、戦後期、現代期の区分、およびデータは小池（2003）に基づく。テキストの分量は各時代おおよそ300万字強に揃えられている。

以上見てきた状況から考えると、先に成立した「ひょっとすると」類がきっかけとなって、「もしかすると」類が成立したと言えそうである。この見方は語形成の観点からも妥当な解釈と言える。擬態語においては「する」を接続して動詞化する形式が生産的である（川瀬2006、深津2016aなど）。「ひょっとすると」類は擬態語でよく起こる語形成が適用されることで成立したと考えられる。一方、「もしか」に「する」の接続する形が成立したことは、それ単独では説明が付きにくい。しかし、「ひょっと」に対して「ひょっとすると」類があることへの類推によって、「もしか」から「もしかすると」類が形成されたと考えれば、ありえる変化として捉えられる。なお、その際、「もしや」からでなく「もしか」から新たな語形が成立したのは、「か」が口語的、「や」が文語的という意識が働いたということだと思われる。

以上のように、可能性想定を表す副詞として現代語で主要な位置を占める「もしかすると」類の成立を促したという点で、「ひょっとすると」類の果たした歴史的役割は小さくない。副詞の呼応における仮定と可能性想定分化は、山口（2000）が指摘するように「もし」の肥大形によって、すでに近世にその兆しが見られていたものの、先に成立した「ひょっとすると」類がきっかけとなり、近代以降に「もしかすると」類が成立することで確立するにいたったと考えられるのである。

#### 4. 副詞の呼応の分化と日本語の歴史的動向

では、副詞の呼応における仮定と可能性想定分化は、日本語文法史にどのような示唆を与えるのだろうか。これまでの文法史研究では、日本語の歴史的動向として、近代語における文法的意味の分化がたびたび指摘されている（中村1948、田中1965、阪倉1993、山口2003、小柳2018など）。よく知られていると

ころでは、古代語では「む」が意志も推量も表していたが、近代語では「う」が意志を表し、「だろう」が推量を表すようになっている。この文法的意味の分化は、従来、述語形式における分化が論じられることが多かった。本稿において考察してきた仮定と可能性想定(注14)の副詞の歴史は、副詞の呼応においても文法的意味の分化が生じることがあるということを示すものである。

また、副詞の呼応において文法的意味の分化が見られるという点だけでなく、こうした分化が確立した時期も注意される。近世においては、いまだ「ひょっと」「もし」ともに、仮定も可能性想定も表す。前節で見たように、「ひょっとすると」類に加え、「もしかすると」類も成立して、副詞の呼応における仮定と可能性想定(注15)の分化が確立したのは近代以降である。これは、分析的傾向(ママ)の見られる時期について「一段と顕著にみられるのは、近代語の成立過程なかでも、特に、現代語の成立過程においてである」(田中1965: 18)と指摘されていることとも符合する。

もう一点、「する」を伴う形式の発達という点で、日本語史的に見て興味深い点を指摘しておきたい。想起されるのは、深津(2016a、2016b)で論じられている、量程度の小ささを表す連体修飾表現における量と程度の機能分化である。深津(2016a、2016b)によれば、もともと〈ちょっとの型〉が量と程度の両方(ママ)を表していたが、新たに程度専用形式〈ちょっとした型〉が現れ、それによって〈ちょっとの型〉が量を表し、〈ちょっとした型〉が程度を表すという棲み分けが生じるという。この棲み分けは近世にはかなり進んでいるようであり、「する」を伴う形式による修飾表現の機能分化としては「ひょっとすると」類、「もしかすると」類によるものよりも早い。時期は異なるものの、副詞(連用修飾表現)と連体詞(連体修飾表現)それぞれにおいて、「する」を伴う形式が発達することで機能によって使い分けるシステムが生じている点が注目される。

## 5. まとめ

本稿では、副詞「ひょっと」の歴史変化を明らかにするとともに、「ひょっとすると」類を視野に入れて仮定・可能性想定と呼応する副詞の歴史を考察し、さらに、副詞の呼応の分化を日本語の歴史的動向と関連づけた。要点をまとめると、次のようになる。

- (17) a. 中世後期から現れる「ひょっと」は、音象徴性を残しつつ、1700年代初頭に仮定と可能性想定を表すようになった。近世末には主に可能性想定を表す「ひょっとすると」類が成立し、近代以降、「ひょっ

と」に取って代わっていく。〔2節〕

- b. 副詞の呼応における仮定と可能性想定分化は、「もし」の肥大形によって近世にその兆しが見られていたが、「ひょっとすると」類がきっかけとなって近代以降に「もしかすると」類が成立することで確立した。〔3節〕
- c. 従来の文法史研究で指摘されてきた文法的意味の分化は、副詞の呼応においても生じる場合がある。また、「する」を伴う形式による機能分化が、副詞にも連体詞（連体修飾表現）にも生じている点があわせて注目される。〔4節〕

本稿は副詞の語史的研究であると同時に、副詞を視点とした日本語文法史研究でもある。積み残した課題も多いが、副詞に（そして連体詞に）注目して日本語史を捉えることの可能性は示したものと思う。

- 〔注1〕 宮崎（2005）でも指摘されているように、「ひょっとすると」類は慣用的な表現を除いて文の述語になることはない。節の形をした副詞と考えておく。
- 〔注2〕 その他、森田（1989）、飛田・浅田（1994）、張（2001）、和佐（2001）、杉村（2009）など、現代語における「ひょっとすると」類、および後述する「もしかすると」類の意味用法についてはさまざまな先行研究がある。
- 〔注3〕 以下、例文の後に（ ）で出典を示した。資料名の後にある〔 〕内の数字は、その資料の成立年代（あるいは出版年代、初演年代）である。『日本語歴史コーパス』による場合はサンプルIDと開始位置を示す。なお、例文の後に（ ）がない場合は作例である。
- 〔注4〕 似たものとして「ひゃっと」「ひょいと」「ひよひょっと」など、「ひゃ」や「ひょ」を構成要素に持つ擬態語が複数あるが、本稿では「ひょっと」の歴史変化に注目するため、それらは扱わないことにする。
- 〔注5〕 『日本国語大辞典 第2版』（小学館）では、物が軽く突き出る様子を表す例として（3d）の例があげられているが、ここで述べたように解釈すべきと思われる。他に注意すべき例として、予想外の出来事が起きたことを表していると思われる文脈で用いられた「ヒヨツトシタ」が、毛詩抄に1例ある。この例は、『抄物資料集成』の底本である書陵部蔵の古活字版毛詩抄では「其ナラハ思リヨノ外ニ何事カヒヨツトシテ事カアラウスラウト思ヘソ」（巻6・4才）となっており、『日本国語大辞典 第2版』に「ひょっと」の子見出し「ひょっとして」の初出例として示されているが、林宗二・林宗和の書写による両足院本毛詩抄では「其ナラハ思慮ノ外ニ何事カヒヨツトシタヲカアラウスラウト思ヘソ」（巻6・3ウ）となっていることから、「ひょっとして」の確例とは言えない。
- 〔注6〕 深津（2010）が「〈尖ったもの〉の様態・動作を表現する」と論じる、中世後期の「ちょっと」にも似ている。
- 〔注7〕 ただし、これらの「ひょっと」に危惧の例しかないというわけではない。なお、危惧に偏るか否かという点で、「もし」「もしも」「もしや」などとは性格が異なる

と言えそうであるが、詳細な検討は今後の課題とする。

- (注8) 近世後期江戸語に見られた「ひょっとすると」類8例のうち、7例が人情本によるものである。残りの1例は、歌舞伎「小袖曾我薊色縫」(1859年初演)に見られた「ひょっとしたなら」である。なお、上方語については、近世前期の浄瑠璃「夏祭浪花鑑」(1745年初演)に「ひょっとすると」が1例見られたのみであった。
- (注9) 「ひょっとすると」類が伸張した結果、「ひょっと」は仮定や可能性想定では用いられなくなり、予期しない動作が突然生じるさまを表すものへと用法が縮小する形で残存する。なお、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』では、仮定を表す「ひょっと」が見られたのは石川淳(1899年生まれ)の作品のみで、可能性想定を表す「ひょっと」が見られたのは、森鷗外(1862年生まれ)、石川淳、梶井基次郎(1901年生まれ)の作品のみであった。
- (注10) 宮崎(2005)は、本質としては「仮定条件節内に生起する可能性を十分に備えている」(宮崎2005:14)と述べ、「ひょっとすると」「ひょっとしたら」が仮定条件節で用いられないのは「～と」や「～たら」などの条件形の重複を避けるためであることを指摘している。しかし、結果的なものだとしても、実際の使用として複合的な形式が可能性想定に傾いているという点は重要であると思われる。
- なお、仮定条件節での使用の可否以外に、「と」「たら」「て」でどのような違いがあるのかという点も検討すべきだが、今後の課題としたい。
- (注11) 中古和文における「もし」については山口(2000)、永田(2001)に詳しい。中古和文における「もし」は推量系の助動詞とも共起するが、仮定条件節や疑問文で用いられることがほとんどである(永田2001の調査では、「もし」124例中、仮定条件節で用いられている例が60例、疑問文で用いられている例が61例である)。
- (注12) 山口(2000)は「もしも」についても言及しているが、近世以降の展開においてさほど重要ではないと思われるため、ここでは省略した。山口(2000)は数量的データを示していないが、康(2012)の調査を見ると、近世後期において「もしや」は疑問との共起に偏る傾向があるようである。
- (注13) 厳密には、「ひょっとすると」類と「もしかすると」類の意味的な違いも考慮すべきだが、ここではほぼ同じ意味を表すものと扱っておく。なお、小池(2003)は、類義語として他に「ことによると」「ことによったら」「ことによれば」(以上をまとめて「ことによると」類とする)も調査している。「ことによると」類も含めた検討は今後の課題としたい。
- (注14) ただし、意志と推量が分化したという述べ方や、仮定と可能性想定が分化したという述べ方は、現代の我々から見たものである点に注意が必要である。例えば、古代語の「む」が意志と推量を表すというのは古代語の感覚を持たない現代の我々から見た理解であって、正確には古代語の「む」は未実現を表したと考えられる(小柳2018:47,256)。同様に、仮定と可能性想定についても、古代語の感覚(あるいは古代語の論理)に即した理解が必要だろう。山口(2000)が古代語の「もし」について「事柄の不透明な実現性・現実性を表す副詞」(山口2000:112)と述べるのは、そうした理解を目指したものと思われる。
- (注15) 田中(1965)は、語彙項目の数が減る「整理」、ある形式が単一の意味専用になる「単純」、1つの形式が表していた複合的な意味を複数の要素に分けて表すようになる「分散」という、関連しあう3つの変化が近代語に見られるとして、これを「分析的傾向」と呼ぶ。

## 調査資料と使用テキスト

日本古典文学大系（岩波書店）、喃本大系（東京堂出版）の用例検索にあたり、国文学研究資料館の本文データベース検索システムを利用した。『日本語歴史コーパス』の用例収集に際して、「中納言」の検索は「キー：語彙素“ひょっと”」で行った。ただし、語彙素が“ひよ”となっているものや、語彙素が“万一”となっているが振り仮名から「ひょっと」と判断できるものについても、気づいた範囲で収集した。なお、引用に際しては、ルビを一部省略したり、旧字体を新字体にしたりするなど、表記を私意に改めた箇所がある。

【中古】源氏物語（『新編日本古典文学全集』小学館）

【中世】史記抄、四河入海、毛詩抄、蒙求抄（以上、岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』清文堂、ただし調査は索引による。毛詩抄については京都大学文学部国語学国文学研究室編『林宗二・林宗和自筆 毛詩抄』臨川書店も確認した）／杜詩統翠抄、漢書抄、古文真宝桂林抄、古文真宝彦龍抄、山谷抄、莊子抄、百丈清規抄、日本書紀兼俱抄、日本書紀桃源抄（以上、大塚光信編『続抄物資料集成』清文堂、ただし調査は索引による）／句双紙抄（来田隆『句双紙抄総索引』清文堂）／湯山聯句抄（来田隆『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂）／中華若木詩抄（中田祝夫編『抄物大系』勉誠社）／論語抄（坂詰力治『論語抄の国語学的研究 影印篇』武蔵野書院）／中興禪林風月集抄（来田隆『中興禪林風月集抄総索引』清文堂）／天草版平家物語（近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版）／エソポのハプラス（大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス本文と総索引』清文堂）／日葡辞書（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店）／日本大文典（J.ロドリゲス著・土井忠生訳『日本大文典』三省堂）／虎明本狂言（池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上中下』表現社）／狂言六義（北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』勉誠社）

【近世】『喃本大系』東京堂出版（第1巻から第16巻まで）／西鶴浮世草子、浄瑠璃、歌舞伎脚本、黄表紙、洒落本、東海道中膝栗毛、浮世風呂（以上、『日本古典文学大系』岩波書店）／春色恵の花、英対暖語（以上、岩波文庫）／春色恋白波（古典文庫）／春色恋廻染分解（浅川哲也編著『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう）／毬唄三人娘（浅川哲也『毬唄三人娘』初編～三編（翻刻）』『人文学報』443、同『毬唄三人娘』四編～五編（翻刻）』『人文学報』458）／花暦封じ文（浅川哲也『花暦封じ文』初編～四編（翻刻）』『人文学報』488）／和英語林集成（明治学院大学図書館デジタルアーカイブス <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/>（2020年3月10日確認）、初版の刊行年にあわせてここに記載）／国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/edo.html#chikamatsu](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#chikamatsu)（Ver.1.0）／国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅰ洒落本』[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/edo.html#share](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share)（Ver.1.0）／国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅱ人情本』[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/edo.html#ninjo](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#ninjo)（Ver.0.8）

【近現代】西洋道中膝栗毛、安愚楽鍋（以上、『明治文学全集1 明治開化期文学集（一）』筑摩書房）／怪談牡丹燈籠（『円朝全集』岩波書店）／当世書生気質（『明治文学全集16 坪内逍遙集』筑摩書房）／新編浮雲（『二葉亭四迷全集第一巻』筑摩書房）／言海（ちくま学芸文庫）／『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社（翻訳作品を除く。また、表2の集計には含まれていない）／国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ1.2）[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/meiji\\_taisho.html#zasshi](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi)

## 参考文献

- 川瀬卓 (2006) 「象徴詞の「と」脱落についての通時的考察」『語文研究』100・101
- 小池康 (2003) 「いわゆる「可能性想定」を表わすモダリティ副詞の史の変遷——モシカスルト類・ヒョットスルト類・コトニヨルト類を対象に——」『文藝言語研究 言語篇』44
- 康雯琪 (2012) 「中世末～近世期口語資料におけるモシ疑問文・推量文の文型と意味」『岡大國文論稿』40
- 小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』くろしお出版
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』岩波書店
- 壽岳章子 (1956) 「擬声語の変化」『西京大学学術報告 人文』7
- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
- 田中章夫 (1965) 「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』1、武蔵野書院
- 張根壽 (2001) 「副詞の共起の傾向性と意味——「キット／タブン／モシカスルト」を対象に——」『筑波日本語研究』6
- 永田里美 (2001) 「中古和文系資料における副詞「モシ」」『筑波日本語研究』6
- 中村通夫 (1948) 『東京語の性格』川田書房
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 深津周太 (2010) 「室町期における副詞「チョット」の意味——抄物資料を中心に——」『名古屋言語研究』4
- 深津周太 (2016a) 「くちよとした型」連体修飾表現の成立と定着」『国語と国文学』93-2
- 深津周太 (2016b) 「くちよとした型」類連体表現の歴史——二つの型による機能分担の形成過程——」『日本語の研究』12-2
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現——疑いと確認要求——』ひつじ書房
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山口堯二 (2000) 「副詞「もし」の通時的変化とその周辺」『京都語文』6
- 山口堯二 (2003) 『助動詞史を探る』和泉書院
- 和佐敦子 (2001) 「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞——疑問文との共起をめぐって——」『言語研究』120

【付記】本稿は2013年4月に九州大学大学院人文科学府に提出した博士論文の一部、および第269回筑紫日本語研究会（2017年3月30日、於熊本大学）、近代語学会研究発表会（2017年12月9日、於白百合女子大学）での発表をもとに大幅な加筆修正を行ったものである。本研究はJSPS 科学研究費（課題番号16K16840、19K13198）による研究成果の一部である。

(かわせ すぐる・白百合女子大学文学部准教授)